令和7年度清須市立清洲小学校評価書

（自己評価書）

学校教育目標	人間尊重の精神を基本理念とし、児童の個性を伸ばし、社会を力強く生きる「知・徳・体」の調和のとれた人間形成を図る。

項目	細目	具体的評価内容	自己評価
自らを高めようとする子どもの育成	研修の充実	現職教育実施計画の下、校内研修の充実を図っている。	A
	基礎基本の定着	学習活動を通して、基礎・基本の定着を図り、望ましい学習習慣を身に付けさせるように努めている。	A
	教員の資質向上	常に課題を意識した教育実践に努め、自己の資質や能力の向上に努めている。	A
	学びを深める児童の育成	スリンプル・プログラムと肯定的な話法の活用を通して、他者との関わりの中で認め合い、児童の学びを深めている。	A
	特別支援教育の充実	特別支援教育コーディネーターを中心に、児童一人一人の個性や適性に応じた指導を行っている。	B
	外国語教育の充実	外国語活動の指導計画に基づき、英語専科教員やALT等により指導の充実を図っている。	A
	ICT活用の学びの推進	ICT機器の利活用を通して、児童の学びを深める授業を展開している。また、情報モラルについて指導の充実を図っている。	B
	特色ある教育活動	児童が意欲的に取り組める学校・学年行事となるよう工夫している。	A
	安全教育の推進	学校安全計画の下、児童が安全に生活する態度や実践力の育成に努めている。また、地域との連携を図りながら、通学路の安全を確保し、事故や事件を未然に防止している。	A
生き生きと生活する子どもの育成	命の尊厳	命を大切にすること、良好な人間関係を築くこと、人権教育に努めている。	A
	道徳的実践力の向上	授業を基本としながら、児童会を中心にあいさつ運動やボランティア活動を充実させ、道徳的実践力の向上を図っている。	B
	基本的生活習慣の定着	児童の実態を把握し、家庭と連携しながら望ましい生活習慣が身に付くよう指導している。	B
	豊かな体験活動	学校行事・各教科等において学習内容に関わる体験活動を積極的に取り入れている。	B
	主体的・対話的で深い学びを引き出す学習指導	各教科において言語活動を適切に位置付け、主体的・対話的で深い学びの視点から、思考力・判断力・表現力の育成に努めている。	A
	伝統・文化の保護	2・3年生での地域学習、4～6年生での校外学習や総合的な学習の時間などを中心として、地域の伝統や日本の文化等にふれ、大切にしていこうとする態度を育成している。	B
	食に関する指導の推進	栄養教諭や給食主任を中心に給食指導の充実を図り、食に関心をもち、望ましい食習慣が身に付くよう指導している。	A
学習環境整備	環境教育の実践	教科等横断的に環境教育を実施するとともに、身近な取組（ゴミの分別、資源ゴミやアルミ缶回収）を通して、環境への関心を高め、資源を大切にしようとする態度や実践力の育成に努めている。	A
	自己評価の公表・説明責任	ホームページを活用して保護者や地域の方々に学校行事や授業の様子を積極的に発信している。また、学校評価の結果を今後の活動に生かしている。	B
	いじめ防止対応	未然防止・早期発見・迅速対応に取り組んでいる。また、学校全体で取り組む組織体制が整っている。	A
	不登校対応	「きよす　ふれあい　プラン」に基づき、きづき・つながり・よりそう取組に努めている。また、ケース会議や校内サポートルームを活用し、教育支援に努めている。	A
	相談・指導体制の充実	教育相談を定期的に行い、必要に応じてスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーに相談できるよう連携している。	A
	学校・家庭・地域の連携	学校内外の行事や活動を通して、積極的に連携・協力を図り、学校・家庭・地域で子どもたちの学びや成長を支えている。	B
	学習環境の整備	校舎や施設が適切に管理され、点検・修理・整備を行っている。	B

A…よくあてはまる　B…ややあてはまる　C…あまりあてはまらない　D…全くあてはまらない

（学校関係者評価書）

評価者　　学校運営協議会委員……櫻井　新也・加藤　英樹・野田　園美・竹市　光代・増野　あけみ・林　ゆかり・谷　尚子

自己評価書に対して

〈指導の達成状況や取組の状況、取組の適切さについて〉

「学校教育目標である「知・徳・体」の調和を目指し、教育活動に取り組んだ。特にスリンプル・プログラムと肯定的な話法を全校で取り入れることにより、児童同士が互いを認め合い、安心して学びを深められる環境を構築できた。また、教員の資質向上では、現職教育実施計画に基づき校内研修の充実が図られ、年間を通じた計画的な学びの場が、教員の資質向上の基盤となった。また、教員同士が学び合う風土が醸成されつつあり、授業の指導法について意見交換したり、ロイロノートを活用して板書例などを共有したりして、より良い授業に向けた話し合いが随時行われたことが教員の資質向上に繋がった。特別支援教育の育成では、コーディネーターが不在となった期間、中心的な連絡調整機能が十分に機能しなかった面があり、当初の目標を完全には達成できなかった。安全教育の推進では、様々な状況を想定した実践的な避難訓練を年間を通して計画的に実施した。また、避難訓練後の振り返りを徹底したことで児童の安全意識が高まった。いじめ防止対応では、組織体制を整え、臨床心理士による講話や弁護士による授業、学年集会での話、人権集会での話などを通して、未然防止に努めることができた。さらに、「きよすふれあいプラン」に基づく、不登校対応や教育支援の拠点としての「校内サポートルーム」を効果的に運用し、児童一人一人の状況に応じた居場所づくりと支援体制を構築することができた。今後は、運用を通じて見えてきた課題を整理し、次年度の活動に繁栄させていきたい。